



OVERSEAS

Barbados —バルバドス国—

海外事情【寄稿】



カリブ便り



中沢 修 NAKAZAWA Osamu

いであ株式会社
海外事業部/業務部

カリブの島国

カリブの島国であるバルバドス。あのロビンソン・クルーソー漂流記の冒頭部分にその名前が登場する。心地よい貿易風が吹きぬける屈指のリゾートアイランド。特に12～4月の乾期は湿度が低く、極めて快適。北米や欧州を中心に多くの人々が長期バカンスを過ごしにこの国を訪れる。当社が実施中のODA事業に係り、この地域を訪れる機会に恵まれた。

リゾートアイランド

かつて英国とバルバドスを結ぶ

超音速旅客機コンコルドがリゾート特急として就航していた。それほど英国人にとっては大切な南の楽園ということか。そのうちのオーロラ号の機体が、バルバドス国際空港脇の屋内に展示保存されている。客席に座る体験も出来る。機内はコンパクトでシンプルな造り。機体、特に翼の流れのようなラインは実に美しい。ランディング・ギア周りの複雑な仕組みは、メカ好きには堪らないだろう。

クリスマス休暇シーズンには各国セレブの自家用大型クルーザーが棧橋に、自家用ジェット機が空

港に到着。彼等は運転手やシェフを同行するらしい。小さな島国で時々真っ白なストレッチ・リムジンとすれ違ったりする。英国の首相や王室もお忍びで訪れるとか。

年間を通じていわゆる大型豪華客船が寄港する。新聞には船の入出航予定欄があり、「今日はどの客船が入港する」といった便りが掲載される。通勤途中に「あれ？ あんな場所に大きなホテルが？」と思うが、それは昨夜寄港した大型船。まさしく浮かぶ巨大ホテルである。寄港すると、棧橋では歓迎の音楽や民族舞踊が繰り広げられ



写真1 南西部のビーチ



写真2 東海岸に打ち寄せる大西洋の荒波



写真3 満開のプルメリア



写真4 首都ブリッジタウンの繁華街



写真5 国会議事堂に翻る国旗

る。乗客は銀行、レストラン、土産店の上得意。私が銀行の窓口で米ドルが必要なので現地通貨を持ちこんで交換を頼むと、銀行員は「どの船の乗客ですか?」と聞く。「仕事で来ている。乗客ではない」と応えると、微笑みつつ慇懃に「申し訳ないが米ドルが切れている」とくる。乗客にはどのようなサービスでも提供しているのだ。

ところで、この地のスーパーには観光クルーズ各社のコーナーが当たり前のようにある。近距離から中長距離まで色々なコースがあり、特にカーニバルライン社は大衆的な価格をPRして人気がある。しかし、何れも別世界の感がある。

カリブ海と大西洋

カリブ海に面している西海岸は海に向かって極なだらかな傾斜地になっていて、豪邸やホテルが立ち並んでいる。引き潮の時は波が穏やかで、水は透明でまるでプールの様だ。この西海岸には北から順にスパイタウン、ホールタウン、そして首都であるブリッジタウンといった比較的大きな街がある。

一方、大西洋に面した東海岸は人家も疎ら。海岸のあちこちに石造りの年代を感じさせるクラシックなホテルやレストランが散在する。大西洋の元気な波が打ち寄せて、貿易風がまともに顔にあた

る。ここは外国人サーファーにとっては天国。サーファー用のバンガローが海岸に建ち並び、ポーチにはハンモックが揺れている。海岸の高台から若者が海をじっと見つめているので、「何を見ているの?」と聞くと、「今日はどの辺りに良い波が来ているか見ているのさ」との答え。大西洋がパノラマで広がっていて雄大な景色である。

英国植民地時代にはこの海岸に沿って、サトウキビ産業のために軽便鉄道が走っていた。かつての線路跡は、景色の良い海沿いのハイキングコースとして整備されている。家族連れやバックパッカーが、日帰り旅行を楽しんでいる。首都のブリッジタウンから片道1.5バルバドスドル(半分にすると米ドル額)で1時間足らずのバス旅が楽しめる。現地の人が是非というので、一度だけ連れて行ってもらった。

カリブの花

雨期や乾期にかかわらず、花が豊富。住宅街には色とりどりのブーゲンビリア、砂漠のバラと呼ばれて親しまれているアデニウム、紅色と白があって綺麗な背の高いフランジパーニ(プルメリア)、高木になるアフリカン・チューリップなどが咲く。ガーデニングも盛んで、書店には庭造りに関する本が結構並んでいる。

首都ブリッジタウン

首都のブリッジタウンは、速足で30分も歩けば中心の繁華街を突き抜けてしまう。オフィス、銀行、デパート、各種店舗、免税店、レストラン、公園があり、買い物を楽しむ人々で何時もここは賑やかである。ミニ原宿のような一画もあり、人々が行き交っている。河口の橋の近くにクラシックな英国風の国会議事堂が建っている。時計塔もあり、川向こうから眺めるとカリブの島国とは思えない。国会(2院制)は1639年に制定され、世界で最も歴史がある議会の一つ。現在の建物は1870年に建てられたもので、外壁は石灰岩で覆われており、陽光に白く眩しい。周囲の新しいビルが貧弱に見えるほどだ。

ワシントンハウス

結核を患っていた兄ロレンスの療養に付き添って、若き日のワシントン(米国初代大統領)がバルバドスに滞在したことがある。この時に生活した館ワシントンハウスが公開されている。ワシントンはここで社交を身につけたと言われている。ここは快適な気候と治安の良さは、昔から一目置かれていた。

閉館日だったが「日本から来た」と言ったら、館員が喜んで案内してくれた。居間、寝室、台所、トイレ、倉庫などが当時のまま。館全体は石造りで歴史を感じる。



写真6 スーパーの果物コーナー



写真7 地ビールBANKS

食事と飲み物

生鮮野菜、食肉、乳製品の大部分は北米等からの輸入。大きなスーパーには豊富な品物が並んでいる。豆腐も豊富な品揃え。

飛魚料理が名物とか聞かすが、それよりも具沢山のチキン・スープが大変美味しい。鶏肉、ジャガイモ、ヤム、カボチャに小麦粉で作った団子がドッサリ入っている。薄味で、熱々をフーフーいって食べる。街の食堂や持ち帰りの惣菜店で味わえ「お袋の味」と言ったところか。団子には好みで少量の砂糖を入れる家庭もあるらしい。

ビールはBANKSという銘柄が、ラム酒のMOUNT GAYと共にこの国の人々の自慢の品。ビールは癖がなくて美味しい。小瓶が標準で直呑み。最近では銀色ラベルのアルコール度数の高いストロングタイプが登場した。ラム酒はこの島でなんと1703年に製造され今に至っている。世界最古のラムブランドとも言える。こちらではストレート、コーラ割り、ココナツ(椰子)ジュース割りが人気らしい。でも一番はビーチでわいわい騒ぎながらの一杯か。

ある日曜日、気分転換に散歩に出かけ、冷たい飲み物が欲しくてカフェに入った。メニューに“紅茶”というのがあったので、それとケーキを注文。やがて店員が恭しく持って来た。仕事の書類を見な

がらストローで大きめなグラスの“紅茶”を飲んだが、どうもおかしい。ケーキに合わないし妙に苦い。そのうちに何だか体がポカポカ、顔が火照るような感じ。でも美味しい。店員に「これは？」と聞いたら、「ラム酒入りだよ」と言われてビックリ。合わないはずだ。

スポーツ

首都の東に緑の競馬場が広がる。サバンナと呼ばれている。英国統治時代には軍の駐屯地で、訓練や行進をこの芝生広場で行ったようだ。年に何回か大きなレースがあり、北米やカリブ諸国の名馬、騎手が参戦する。レースが開催される前から、新聞やテレビで予想が報道される。前日には万国旗が張り巡らされたりして華やかな雰囲気になってくる。

そしてレース当日は大賑わいで、



写真8 カリブの居酒屋ラムショップ

周囲の道路沿いには日本の縁日よろしく屋台が建ち並ぶ。手作りランチを芝生に広げる家族連れ、馬券を買う人、写真を撮りあうカップルと、それぞれ楽しんでいる。メインスタンドには着飾った名士がずらり。全員が起立し、バルバドス国歌が流れると歓声と口笛。

英国の影響が強く、普段も馬術が盛んで、他にはクリケットとサッカーが人気。野球は知られていない。ワールド・ベースボール・クラシックなんて報道もされなかった。バルバドスは周辺の旧英領諸国と共に、カナダ、インド、豪州などと同じ英連邦構成員。何かとお互いに親近感を感じているようだ。クリケットはそれらの国々を結び付ける役目を果たしている。クリケットのワールドカップはオリンピック並みの関心と呼んでいる。

市内の競技場でも国際試合がある時は大渋滞。特に試合後は大変。車に最頂のチームの国旗を立てて、賑やかに走行している。デパートにはクリケット用品のコーナーがあり、ボール、バット、帽子、シューズ、シャツなど、見るだけでも結構楽しい。木製のバットは重くしっかりとした木で丁寧に仕上げられている。印象的なのは厚手の靴下。いかにも品質が良さそう。



写真9 首都近郊の競馬場



写真10 ビーチパーティー

中年以上の人に聞くと大抵「若い時にはクリケットをやった。今はやらないけどね」という返事が返ってくる。

金曜日は野外パーティー

南海岸にある空港から車で15分ほど行った所にひなびた漁村オイステインズがある。獲れ立ての新鮮な魚を売るマーケットがあるが、金曜日の夕方からは島で一番賑やかな場所の一つになる。まずカリプソやレゲエといった音楽が奏でられ、地元の人と観光客が夕闇と共に集まってくる。人種も様々。家族、友達同士、カップル、一人。目的は皆同じ。目の前で料理してくれる新鮮な魚やポテトを頬張ること、相席の見知らぬ人と挨拶を交わし気楽な会話を楽しむことである。まるで巨大な青空レストラン。タックバンドという数人編成の陽気な楽士が通路を回る。社交ダンスもカリプソも、何でも誰でも踊って良い雰囲気だ。

私はおとなしく、シイラの付け焼きでビールをちびちび。しかし東洋人は極めて少ないから、周りから色んな人が話しかけてくる。会話力のアップになれば、と勇気を奮い起して出かけた。夜が更けるほど益々人が増えてきて、賑やかになってくる。週末のリラックス空間である。食べ物が安いから老若男女が皆軽装で集う。でも酔っ

払いは見たことがないし、喧嘩も無い。ここなら小さな子供を連れてきても大丈夫。確かに、乳母車を押してくるお父さんがいる。お母さんは手ぶらだ。

教会

日曜日の朝はあちこちの教会から讃美歌や説教の声が聞こえてくる。男性は少年も背広にネクタイで、女性はドレスアップして、ハイヒールに帽子を被って教区の教会に参集する。普段はカジュアルな服装なのに、この日は正装している。ミサの後は教会の広場、駐車場で顔見知りや挨拶やお喋り、情報交換の場になっている。青空の下で華やかな交歓の場といった趣がある。誰でも歓迎してくれるが一寸入りにくい。

日本について

街を走っている車はほとんど日本製。日本の中古車は評価が高い。何よりも故障が少ないからだとか。

2010年夏、南アフリカでサッカーのワールドカップ開催され、カリブ地域でも物凄い熱気。様々なメディアで各試合を紹介。星取表がレストランや事務所の壁に貼ってあったりする。日本チームが頑張っ

大いに誇りに思った。英連邦構成国というお国柄から英国応援が多い。対ドイツ戦で、ドイツのゴールがあると街に悲鳴がこだました。一方、アンチ英国勢も存在していて、ドイツが英国に勝つと、喜んで

いる人も見かけた。2011年は東北の大災害で注目された。2011年3月11日、CNNを見ていたらJAPANの大きな文字が画面に出て、アナウンサーは地震、津波と繰り返していた。津波の恐ろしい映像が繰り返し放映されていて、事実とはとても信じられなかった。幸い暫くして家族と電話で話が出来て安心した。ホテルでも、市内の店でも、何処でも「日本人か？ 家族は大丈夫か？ 大災害にあつて大変だな」と皆さん暖かい言葉をかけてくれた。そのうちに原発の事故が頻繁にニュースに登場するようになって、これまた心配の言葉が寄せられた。「東京は大丈夫か。停電は？ 食料は足りているのか。水は安全か」と質問の嵐。街を歩いていて、見ず知らずの人が声をかけてくれたりして「仲間だなあ」と感じた。

何かと恵まれている国だが

気候に恵まれ、カリブ地域では最東端に位置しているの、ハリケーンの被害もこの地域では少ないと聞いている。何かと恵まれている国だが、それでもカナダに移住する人、米国に移住する人がいる。小さな島国で皆が知り合いみたいなので、居心地は良いが、何かと限界を感じて大きな国に憧れる人がいるようだ。観光が主要産業で、世界の景気の影響をもろに受ける点は厳しい現実である。世代間のギャップも論じられている。ここにも日々の生活がある。